解説・報告

—海外で活躍する獣医師（Ⅳ）—

終わりなき修行の旅：苦闘の経験から考える臨床獣医学教育の展望

林　　慶[†]（コーネル大学名誉教授，東京大学客員教授，獣医外科専門医）

1　はじめに

アメリカの獣医臨床教育のシステムは実に優れている（図1）．私は1993年に東京大学獣医外科学教室を卒業して以来，かれこれ30年以上も米国の4大学にて獣医外科学を勉強してきた．本稿の目的は私の経歴を自慢することではなく，私が米国で身をもって経験した，主に苦闘の実体験から学んだ教訓を，情熱を持って日本の読者に伝えることである．そしてこれが今後の日本における獣医学教育の展望への議論に少しでも有意義な刺激となることを期待する．本稿は2010年に本誌に掲載した拙作（日獣会誌63，251～258（2010））の続編で，前回は研修医としての“修行編”，今回は教員としての“奮闘記”，と位置付けたい．

アメリカと一言で言っても，実際はその合衆国という名のごとく50以上の国が集まっているようなもので，“アメリカとは”という一般論は全く通用しない．私は2003年以降20年間ほど大学教員として，研究，臨床，教育への貢献という“三刀流”を目指して働いてきた．しかし，そもそも才能も財力もない，体力と気合いだけ，煩悩の塊のような私にはこれは身分不相応のゴールであって，まさに苦闘，奮闘の20年間であった．よその国にお邪魔させてもらっているので仕方ないとはいえ，理不尽な扱いを受け耐え難き屈辱を感じたり，信じられないような不正を目の当たりにしたりといろんなことがあったが，これが海外で働くことの現実なのかもしれない．幸いなことに家族と多くの恩人たちに支えられ，2012年にカリフォルニア大学にて准教授として終身雇用権（テニュア）を獲得，2020年にニューヨーク州の名門コーネル大学の獣医外科学の教授に昇進し，ついには2024年に同大学の名誉教授という栄誉を授かった．これらは決して，日本で昨今話題になっている海外学歴詐称ではない．論文も100本以上書き，引用係数h-indexも30以上，難手術も5,000件以上成功し，30人以上いる教え子の外科専門医たちに恩師としてACVS専門医学会にて表彰され，学生にもそこそこ愛され，バイブルと呼ばれるような教科書も数冊執筆した．

しかし，である．動物医療の革新の最先端を走るアメリカにおいても，動物の健康と福祉を取り巻く環境は依然として問題山積で，私が従事し達成してきたことは単に自己満足にすぎないのではないかとふと不安になる．さらに以下に実例を示すように大学内での馬鹿馬鹿しい政治的権力闘争にはほとほと愛想が尽きたのが実感である．優れた一般臨床医を教育，産出するという意味では世界一のアメリカであっても，大学教育の“根本的問題”は現実に存在している．それらを指摘することにより，日本及びアジアにおける臨床獣医学教育の将来設計を考える際に，アメリカと同じような“しくじり”を繰り返して欲しくないという希望を持って執筆している．本稿は前回と同様に個人的で偏見に満ちた雑文であるが，これまでお世話になった人々に感謝を申し上げるとともに，皆さんが興味を持って面白いと感じてくれること，そして多くの人にポジティブな刺激をあたえ，動物の福祉に真剣に貢献しようと奮起するものが現れてくることを強く願う．

2　カリフォルニア大学教員時代（2005～2012年）

カリフォルニア大学は獣医学の全米ランキングで1位や2位にランクされるような有名校で，現実的に規模や就業者数は全米ナンバーワンである．獣医大学のあるデービスという町は海からも山からも遠い何もない砂漠のような場所にあり，カリフォルニアといえば聞こえはいいかもしれないが，冬は雨季で毎日雨が降り，春は花粉と虫だらけ，夏は気温35度以上で山火事に苦しむとい

† 連絡責任者：林　　慶（コーネル大学）
930 Campus Rd Ithaca, NY 14853, USA　☎ +1 607-253-3060　FAX +1 607-253-3788
E-mail : Kh528@cornell.edu

う実に酷いところである．先に述べたように，アメリカの大学の臨床教育システムは実に効率的で理にかなっており，大学の獣医課程を卒業するころにはほぼ全員がかなりまともな臨床能力を持つ．別の言い方をすれば，達成すべき項目が各分野で厳密に設定されていて，それらにいちいちパスしなければ進級，卒業ができない（図1）．

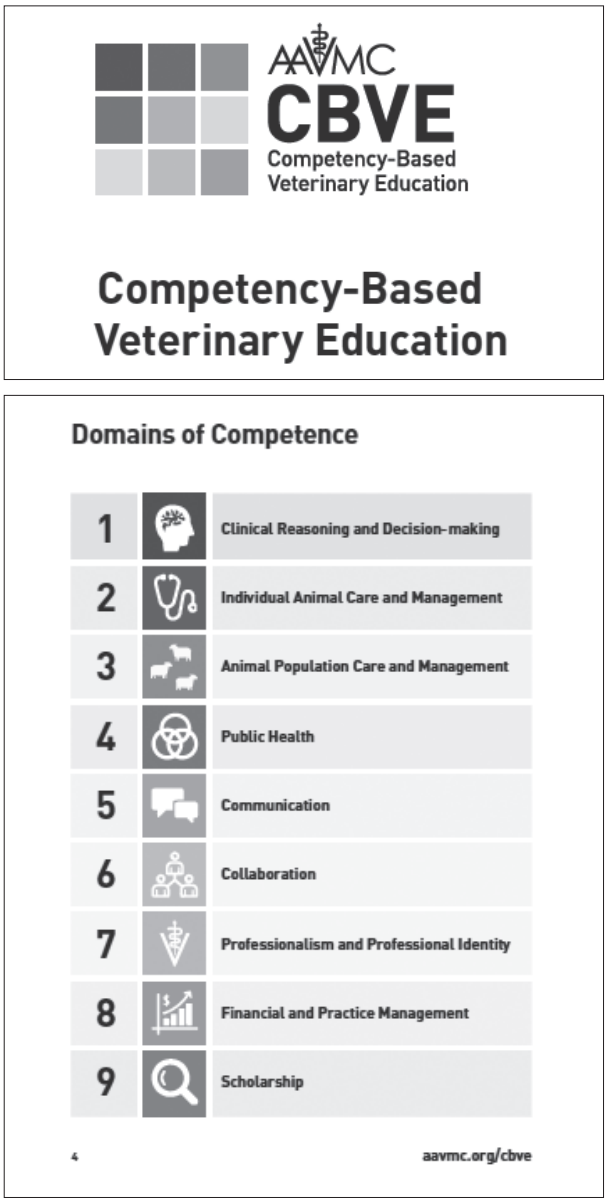


図1　獣医療を行うことのできる能力を獲得したか？ という問いをもとに合否を決めるアメリカの教育システム．
臨床的な判断能力がまともか？ 仲間や飼い主とちゃんと正直かつ親切なコミュニケーションができるか？ かつ，プロとして毅然とした態度で難しい状況に対処できるか？ わからない病気や治療法に対して調べ物のやり方を知ってるか？ などから，いくらくらい飼い主に負担がかかったり病院の儲けが出るかを理解しているか？ などまで，各項目の能力をいちいち習得しないとアメリカでは獣医大学を卒業できない（つまり獣医師になれない）．　（資料 https://cbve.org.）

このシステムがアメリカの獣医療において揺るぎない土台を築いていることは間違いない．特にアメリカの伴侶動物（犬や猫）の臨床医の診断能力は世界的に見て圧倒的に優れている．日本には，整形外科の永岡先生や陰山先生そして心臓外科の上地先生など，世界に誇る匠が多数活躍しており私も個人的に教えを受けている．しかし，なぜ私がアメリカで学んできたかというと，単純に，病気や怪我で苦しんでいる伴侶動物の病気を正確に診断しその苦痛を少しでも和らげてあげる能力を教育するというシステムを，本格的に学びたかったということになるであろう．

前稿に詳しく触れたように，長年にわたる厳しい修行（大学院，研修医，若手教員職）を，アメリカの中西部北部（カナダのすぐ南）にある，いわゆるビッグ10スクールのウィスコンシン大学とミシガン州立大学にて拝受した．その後，有名なカリフォルニア大学デービス校（通称 UC-Davis）に提示された高給にふらふら釣られて，責任重大な終身雇用枠の助教授職にあまり深く考えずに就任した．そして，争いごとをなんとしてでも避ける傾向にある私であっても，ことごとく学内の政治闘争に直接巻き込まれていくのである．そもそもカリフォルニア大学を考慮したのは，関節鏡の共同研究をしていた頭脳明晰なカート・シュルツ先生に誘われたことは大きい．先に述べたように，給料も研究費も当時としては破格を提示され，また家を買うための頭金も大学が出してくれる，気候も良さそうだし，日本では有名なところだから，いい話だなぁ，と軽い気持ちで終身雇用枠の職を引き受けた．しかし，世の中そんなうまい話はないのである．カリフォルニア大学の破格のオファーは単に，外科医やその他の専門医が次々辞めてしまっていて，しかも施設も老朽化してきたこともあり，獣医師を教育するための資格を剝奪される寸前の沈みゆく船であったためにすぎなかったのである．これを知ったのは契約にサインした後，まさに後の祭りである．

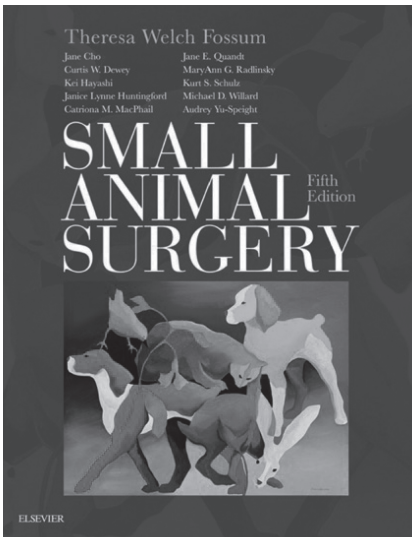
2005年にカリフォルニア内陸の片田舎，デービスという町に着くや否や，誘ってくれたシュルツ先生をはじめ，著名な軟部外科医2名，腫瘍外科医2名，一般外科医2名，計7名の外科医が，“来てくれてありがとう，あとはよろしく～”と言って，1年以内に全員一気に辞めてしまったのである．唯一残ったのは，私の1年前に，これまたペンシルベニア大学における政争から逃げてきたばっかり，現在も私の親友である，エイミー・カパトキン先生だけであった（図2）．シュルツ先生は今でもその当時のことを悪いと思っており，ことあるごとにいろいろと声をかけてくれて彼のおかげで教科書を3冊共著させてもらったので，恨み言はない（図3）．とはいうものの，人生初の終身雇用職のスタートがこんな感じで始まったのはショックであった．さらに画像診断医と

腫瘍科医もほぼ全員辞め，病院内の主力専門医はほぼ全滅，なぜか神経科と麻酔科だけは米国大学の常識よりもより多くの教員が残っていた．なぜだと，当初は困惑したが，だんだんそのカラクリがわかるようになる．外部の人や，研修医時代には全く想像のつかない，信じられないような魑魅魍魎の世界が待っていた．

平和な日本と優しいアメリカ中西部北部で育った私は，無知で世間知らずだったのであろう．初めて出席したカリフォルニア大学の学部会議で，就任早々の私の目の前で学長室代表の副学長二人が，待遇改善を求めていた外科専門医に対して，“文句があるなら，今すぐ辞めろ，お前らの代わりなんていくらでもいる”と言い放ったのだ．そしてみんな辞めていった．引っ越してきたばっかりのエイミーと私は辞めるわけにもいかず二人で奮闘した．しかし，さらに“傷口に塩を塗る”とはまさにこのことで，学長一派はお友達の外科医達をよそから連れてきて，彼らを1週間6千ドルの給料で臨時に雇ってその場を凌ぐという作戦に出た．さらにこれらの臨時雇外科医は，大学の最も崇高な機能である教育と研究には全く関与しなくていいのである．他の専門科でも同じような事態が続き，常勤教員達のモラルが下がって人材の流出が続いたのはいうまでもない．ちなみに，神経科と麻酔科の重鎮はこの学長室と古くからお友達で（マフィアと呼ばれていた）いろんな意味で守られていて，信じられないような忖度の世界が広がっていたのだ．この頃から政治屋を敬遠するようになる．正直者で不正を許せないエイミーは正義のために戦い続けたが，彼女にはさらに不幸が襲いかかる．

図2　長年レジデント（外科研修医）やテクニシャンや学生を“護って”きた，私の相棒，闘う天使エイミー・カパトキン先生と，カリフォルニア大学の症例検討会にて．

アメリカで神経科というと内科の専門分野で，“神経外科”は，外科医が担当すべきなのか神経科医が担当すべきなのか，大いに議論の分かれる問題で現在でも解決を見ていない．特にカリフォルニア大学ではこれが火種となり全面戦争にまで広がってしまった．神経科医は正式な外科のトレーニングを受けていないので手術をしない先生が多く，一方，外科医は神経病診断の正式なトレーニングを受けていないので，基本的にT3L3の椎間板手術以外には手を出さない人が多い．私は研修医時代に夜中に何度も椎間板の手術をした辛い経験から，神経外科は一切やりません，というかやりたくありません，とカリフォルニア大学との契約書に宣言していた．しかし，外科のレジデントは相当数の神経外科を経験することが規定で要求されている．善人のエイミーは，外科レジデントに少なくとも椎間板手術の技術くらいは習得することが必須と考えていて，なんとか外科レジデントに神経外科の教育をしようといろいろな策を提案した．これを神経科が完全拒絶.しかも神経科は外科レジデントを



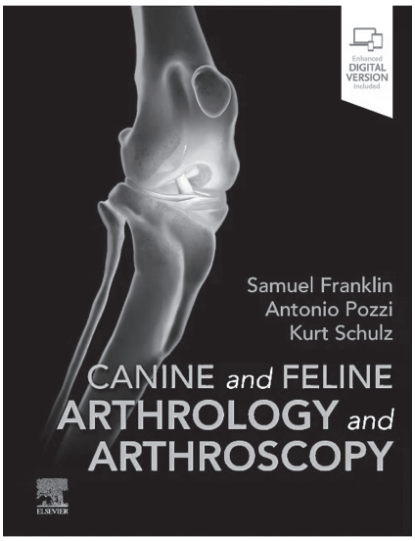


図3　世界中でベストセラー
フォッサムの外科教科書第5版(左)，人工関節(中) と関節鏡(右) の教科書などをシュルツ先生と共著で書かせてもらった．

教育することも拒否．これに端を発し，救急医療科，麻酔科，内科を巻き込み，病院内が全面戦争に突入する．私は狡猾にも神経外科戦争からは身を引いていたので，直接被害を受けなかったが，レジデントのために戦ったエイミーは，この後ずっと神経科一派によって，昇進審査のたびにあからさまで執拗な妨害工作に苦しんでいた．

もうカリフォルニア大学は辞めよう，と最終決断要因となったのが，あまりに下手な外科医の存在を許す大学の政治的体質である．これも賛否両論であるが，人員を確保するために，夫婦（パートナー）2人を同時に雇うことはアメリカでは一般的である．カリフォルニア大学では，前述のような事情で長年，外科教員不足であったが，一気に，ペンシルベニア大学でトレーニングを受けた外科医をパートナー制を利用して数名採用することとなった．問題は，ペンシルベニア大学というところは，エイミーが辞めた後，事実上整形外科不在であったため，整形外科が全くできない専門医を輩出していたことである．彼らはカリフォルニア大学で手術を始めるが，動物虐待とも取られるような稚拙な手術のため重度な合併症が多発したのだ．これが原因で，今回は外科セクション内で戦争が起き，プロの仲介人を雇ったにも関わらず和解不能と判断された．そして学長室は，外科セクションを完全に二分し両者間の交流を断つという解決策を命令した．これはアメリカの大学では前代未聞である．

世の中，そうそう悪いことばかりではない．カリフォルニア州は人口も多いことと関係し犬猫の数も非常に多く，優秀なレジデント達やフェロー達と一緒に私自身も貴重な手術の経験を大いに積むことができた（図4）．エイミーは養子を迎えるために長期休暇を取り，私は一人ぼっちになり孤軍奮闘したこともあったが，われわれの献身に感謝してくれたその当時のレジデント達は，後ほど“Honor a Mentor（恩師に感謝しよう）”という賞を専門医団体（ACVS）にノミネートしてくれ，同時に受賞し教育者としていわば殿堂入りできたのは最高に嬉しかった（図5）．アメリカの大学の教員の昇進制度は，一般的にオープンでフェアなものとして制度化されている．私自身も差別主義者の学部長や外科医一掃を試みる副学長などに嫌がらせを受けたものの，2012年に2階級特進で終身雇用権を獲得した．しかし大学上層部に対する不信はどんどん募っていった．アメリカでは2020年に民主主義が危機に晒されたことなどもあることを考えると，カリフォルニア大学ではこんなこともあったなぁと現在もとても複雑な気持ちでいる．ここから学んだ教訓は，政治に巻き込まれず，患者の健康と学生の教育に集中できる理想郷をどこかに求めようということであった．しかし“隣の芝は青い”の諺のごとく次の機会を求めてしまった私はしくじりを繰り返す．

図4　カリフォルニア大学時代には実にさまざまな貴重な経験をさせてもらった．

フェローとして無給で無休の獅子奮迅の活躍を見せた青木康至先生は現在カナダで1位に投票されるような最高の外科教員に育った（上）．わがことのように嬉しい．

動物園の虎の関節鏡手術などの特殊手術を依頼された（中）．うまくいってホッとした．

全米で最も売れているゲームの冠となっている伝説のフットボールコーチ，マッデン氏（故人）の愛犬の手術を担当し，フットボールの試合観戦に招待された（下）．

図5　全米獣医外科専門医の団体（ACVS）により表彰され教育者としていわば殿堂入りを果たした．
　推薦のお言葉は元の教え子，現ペンシルベニア大学外科教授のキム・アグネロ先生．

3　ニューヨーク州コーネル大学教員時代（2012～2024年）

コーネル大学は近代獣医学の歴史を作ってきたことでも知られ，アイビーリーグというアメリカ名門校群の中で最も田舎にある大学である．キャンパスのあるイサカという町はニューヨーク市から車で4時間以上もかかる辺鄙な場所にあるが，森と川と滝と湖に囲まれ，さらに四季にも恵まれ，つまり美しく静かな文化的な素晴らしい学習環境にある．解剖の教科書のミラー，エヴァンス，デラハンタなどは有名であるが，近年では伝説の内科教授“触診の神様”ホーンバックル先生や軟部外科の達人ジェイ・ハービー先生，神経科と外科の両方の専門医資格を持つデューイ先生など，実際の臨床能力を持つ教育者の評判が高かった．また馬の外科医チームも世界的に有名であった．学生の教育に関しては，昔から行われてきた基礎から臨床にカリキュラムを移行していこうという旧来システムを変え，器官系ごとに基礎から臨床を結びつけて学ぼうという，人医学に準ずるシステム導入した革新的な試みを初めて行った獣医大学である．残念ながらこの試みは教員への負担の増加と学生の混乱のため失敗に終わったが，現在ではハイブリッドシステムに変更し教育成果を上げている．

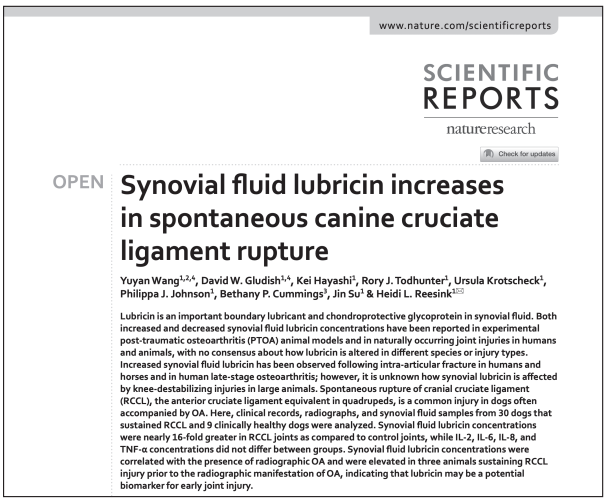
私の専門である伴侶動物外科に関して言えば，前述のハービー先生とフランダース先生が軟部組織外科の臨床をアメリカのトップクラスに押し上げ，その教育の質の高さには定評があったが，整形外科に関しては神経外科と整形外科を両方担当していた名物教授のトロッター先生が引退して以来，長年低迷していた．そこで当時学長（現在全学の総長）のコトリコフ先生主導でテコ入れをしようということになったらしい．コーネル大学は全米でも珍しいハイブリッド大学で，アイビーリーグの他の7校と同様に母体は私立大学であるが，獣医学のような公共性の高い専門科は州立大学という面白いスタイルで経営されている．よってコーネル大学の獣医大学教員の給与体系は基本的に州の公務員に準ずるので控えめではあるが，福利厚生が実に充実している．何よりも，環境の素晴らしさと大学全体のレベルの高さに惹かれ，また何人かの恩師たちの後押しもあり，西海岸から東海岸への大移動の異動を決意した．

臨床が忙し過ぎたカリフォルニア大学と違い，コーネル大学では教育の重要性とその楽しさを学ばせてもらった．先述のハービー先生は学生に外科の基本を，主に避妊去勢手術を用いて教えることで学生に最も敬愛されていた．このように，ここではいわゆる“ハンズオン”の理念の実践的臨床教育に重きが置かれている（図6）．特に，製薬会社で使われていた犬を積極的に引き取って安住の地を提供するシステムが崇高であった．こういった形で余生を過ごす犬（ティーチングドッグと呼ぶ，犬の方が学生を教えるという能動的な意味）は学生の視診，聴診，触診の学習に大いに貢献してくれている．また，これらの犬が何らかの病苦を体験していると判断された場合，安楽死という選択性の重要さも学生は身をもって学んでいくのである．最終学年の学生は，研修医たちと共に，教育病院での臨床活動の主戦力となり，教官の仕事は主に監督機能にある．学生には研究活動（卒論など）は全く要求されないが，シニアセミナーと呼ばれる症例報告（発表と抄録のまとめ）は必須である．

図６　コーネル大学の真の伝統は触診の技術を会得することである．
　最終学年の臨床研修を始める前に学生は徹底的に触診の手技を学習する．写真に示されているように，全学生が“ホーンバックル先生の触診バイブル”に従って，全身を優しく触る診断学を徹底的に学ぶ（左）．
　最終学年は１年以上の病院研修で，その間も学生がほぼ全ての診察，診療活動を担う（右）．まさに臨床の言葉のごとくいつも患者の傍にいる．

コーネル大学における研究活動の最大の利点は，いろいろな分野のスペシャリストと共同研究が比較的簡単に行えることであった．臨床と教育と研究を３分の１ずつ全て行わなくてはいけないパートタイムサイエンティストとしては，フルタイムの研究者とまともに勝負をしても勝ち目はない．潤沢な資金のあるアメリカでもたかが獣医学のために研究費をとってくることは至難の業で，私は早期の時点で他の専門家と共同研究を目指す現実路線に方針を変更していた（図７）．研究者としてのエゴは完全に捨てていたのである．幸いなことに，コーネル大学の医学部の整形外科部門は，ニューヨーク市にある全米最古で常時ランキング一位の Hospital for Special Surgery（HSS）という整形外科専門病院で，動物を勉強している私を重宝し数多くの共同プロジェクトに参加させてくれた．前述のティーチングドッグのシステムと同様に，製薬会社からビーグル犬を救済し，MRI や関節治療の投薬を行ってデータを蓄積した後に，里親を探すという作戦（レスキューアンドアドプト）に参加することは真に心が洗われる思いであった．この HSS にはなんと 3T の MRI が 12 台もありそれらを無料で使用できたおかげで，MRI 専門家のパウンダー先生とペーパーを量産し，犬の整形外科学の基礎情報を構築できたことが，私の獣医学における最大の貢献だと思う．

さて，問題の臨床任務である．伴侶動物整形外科外来に専門家が来たということで，ニューヨーク州だけでなくカナダなど膨大な範囲から難しい紹介症例が殺到し，臨床能力に優れ陽気な麻酔チームの先生に頭を下げながら多くの手術をさせてもらい，研修医の手術アシストに徹して患者の治療に専念した．成果も上がり非常にうまくいっていると思った．しかし，またまた大きな問題に直面する．私のこれまでの諸悪業の因果応報であろう，



www.nature.com/scientificreports

SCIENTIFIC REPORTS
natureresearch

Check for updates

OPEN

Synovial fluid lubricin increases in spontaneous canine cruciate ligament rupture

Yuyan Wang[1,2,4], David W. Gludish[1,4], Kei Hayashi[1], Rory J. Todhunter[1], Ursula Krotscheck[1], Philippa J. Johnson[1], Bethany P. Cummings[3], Jin Su[3] & Heidi L. Reesink[1][2][3]

Lubricin is an important boundary lubricant and chondroprotective glycoprotein in synovial fluid. Both increased and decreased synovial fluid lubricin concentrations have been reported in experimental post-traumatic osteoarthritis (PTOA) animal models and in naturally occurring joint injuries in humans and animals, with no consensus about how lubricin is altered in different species or injury types. Increased synovial fluid lubricin has been observed following intra-articular fracture in humans and horses and in human late-stage osteoarthritis; however, it is unknown how synovial lubricin is affected by knee-destabilizing injuries in large animals. Spontaneous rupture of cranial cruciate ligament (RCCL), the anterior cruciate ligament equivalent in quadrupeds, is a common injury in dogs often accompanied by OA. Here, clinical records, radiographs, and synovial fluid samples from 30 dogs that sustained RCCL and 9 clinically healthy dogs were analyzed. Synovial fluid lubricin concentrations were nearly 16-fold greater in RCCL joints as compared to control joints, while IL-2, IL-6, IL-8, and TNF-α concentrations did not differ between groups. Synovial fluid lubricin concentrations were correlated with the presence of radiographic OA and were elevated in three animals sustaining RCCL injury prior to the radiographic manifestation of OA, indicating that lubricin may be a potential biomarker for early joint injury.

図７　コーネル大学の並みいるノーベル賞受賞者とは会ったことはないが，化学や工学を専門とする研究者と共同研究を盛んに行うことができ，Nature のサイエンティフィックリポーツの共著者として入れてもらったことは実にラッキーであった．

同僚の外科医たちが（カリフォルニア大学の時と同じように）ほぼ全員いなくなってしまったのである．先述の軟部外科の偉大なハービー先生とフランダース先生の引退，新たに採用した外科医２名の同時の出産育児休暇，今までいた外科医２名の連続のサバティカル（長期休暇），全てがほぼ同時に襲ってきた．またまた伴侶動物外科セクションで教官一人になってしまったのである．優秀な研修医たちそして研修医最上学年のマリーナ・マコンキー（まだ専門医でもないのに教官の役割を押し付けられた）と，みんなで踏ん張った．しかし無能無策な学部長は“パーフェクトストームですねー（複数の災厄が偶然同時に重なり破壊的な事態に至ること），でも臨

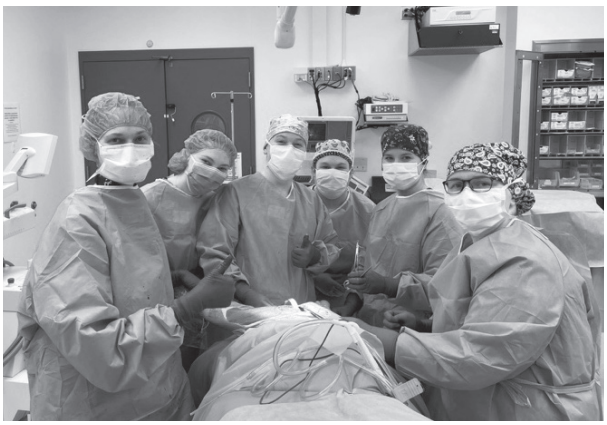


図 8　コーネル大学の股関節全置換チーム（左）とウィスコンシン大学の TPLO の手術風景（右）．アメリカの大学では，術者，助手，器械出し，外野，見学，全て女性であることも珍しくない．

時雇いを雇っておけば福利厚生払わなくていいから結構安くつく”，という信じられないようなことを言い放った．これは患者の治療や学生の教育の質と一貫性を全く考えていない発言だ．私の印象では，私自身を含め，名声の高いコーネル大学に来て“虎の威を借る狐作戦”の教員が多くなっているような気がする．優れた教育者はどんどんと引退していった．カリフォルニア大学のように表立って喧嘩する好戦的な人はいなかったが，逆に裏で盛んに政治工作をしたり，家族採用の便宜を計りまくっている上層部がたくさんいたり，手術がすごい下手な人がどんどん偉くなって権力を濫用していたことなど，大学政治の現実，真の姿を学ぶこととなる．

2020 年に無事に教授に昇進したが，教育，臨床，研究を続行する代わりに，管理職に移行することを提案される．決して白人至上主義があるわけではないが昇進するにつれアメリカ東部の既存体制（エスタブリッシュメント）には肌が合わないことを薄々感じていた．管理職に全く興味がなくリーダーシップ能力にも乏しい私は一線から身を引き，地味に研究と教育と手術のアシストを静かに続けていく決断をした．幸いなことに，コーネル大学卒の若い優秀な専門医が少しずつと母校に帰ってきて教職についている（ちなみに母校のウィスコンシン大学，前職のカリフォルニア大学でも同様，多くは女性）（図 8）．コーネル大学就労からの教訓は，大学はどこへ行っても政治の世界で，どこへ行っても一緒だということだ．コーネル大学で働いた恩恵は，世界のどこであっても伴侶動物への優しい触診技術を教育することが重要だと身をもって体験したことであろう．

4　アジアにおける教育活動（現在）

2024 年現在もコーネル大学で隠居生活を続けているが，可能な限り日本及びアジアにおける教育活動に参加させてもらっている．アメリカで学んだことを伝え，そして自身が経験した失敗を若い人が繰り返さないように，より効率的に伴侶動物の健康の維持と福祉の向上を実行できる獣医師を教育する“環境”を作っていくことに貢献していくつもりである．どこも人手不足で大変だが，オンライン教育など進んだ技術をどんどん取り入れてこの目標に一歩ずつ近づいていきたい．

図 9　東京大学にて
チーム望月の手術のアシストや天野先生主導のオンライン症例検討会などで母校に恩返しをしていきたい（随分前に家出したままだったので）．

日本においては，アメリカの臨床教育に準じた基礎臨床診断能力の教育を，いくつかの大学や JVEC-online などのオンライン教育システムを応用して協力させてもらっている（図 9）．また，日本の叡智を英語論文にするお手伝いを積極的に行なっている．特に私の専門である整形外科学においては，先に述べたように永岡先生，陰山先生など，基本原則をアメリカなどで勉強したうえでご自身のオリジナルの手術法を考案されている日本人が多数いる（図 10）．さらに枝村先生，種子島先生，鞆先生，宗像先生，本阿彌先生，富張先生をはじめ多くの先生による日本独自の研究成果や，アメリカにはあまりない超小型犬の手術成果など，世界中の伴侶動物に役に立つようなエビデンスを日本から世界へ発信するお手伝いを

図 10　名古屋の陰山先生（左），大阪の戸次先生（中）千葉の小林先生（右）らと共同で小型犬における手術成績の客観的な評価を英語論文化することを目指している．

図 11　“ハンズオン実習”への参加
常に向学心を持っている九州の名手，樋口先生，伊東先生らが新しい診断技術を学ぶお手伝いをしたり（左），“心熱きインストラクター”是枝先生，天野先生の TPLO 実習助手を務めたり（中），逆に，チーム本阿彌に超音波の基本技術を学んだりしている（右）．

していきたい（図 10）．さらに，コーネル大学で学んだ“ハンズオン”（実際に手を動かして技術を習得する）実習を日本でもお手伝いし，特にホーンバックル先生の触診の技などをさまざまな機会を応用して普及していきたい（図 11）．

アジア各国においても，特にアジア独自の獣医外科学の知識の向上に貢献していきたい．10 年ほど前より，アジア全体の獣医専門家の学会活動が活発になってきている（図 12）．そしてついに 2023 年にアジアにおいても外科の専門教育に向けた具体的な議論が開始した．私個人的には，2024 年より，韓国ソウル大学，台湾大学，タイのチュラロンコン大学を訪れ，ホーンバックル先生の触診の原則や自身の専門の跛行診断を主題とした授業を担当している（図 13，14）．

5　最後に．メッセージとお願い．

私が今まで就業してきたカリフォルニア州やニューヨーク州などではペットショップは禁止されている．多くのカナダの都市でもペットショップは禁止である．アメリカ，日本に関わらず，私の専門分野である犬と猫の整形外科疾患の多くは先天性疾患である．わかりやすい言い方をすれば，無責任な交配や利益至上主義のペット販売に原因があることが多く，あまりに多くの犬や猫が痛みや機能障害に苦しんでいる．またカリフォルニアのある地域では犬猫の避妊去勢は飼い主の義務でこれが法制化されている．政治家には失望しかないが，日本においても何らかの法整備が必要と考え，私に何ができるか日々頭を悩ませているので画期的なアイデアがある方はぜひ連絡をいただきたい．実際にできることとしては，ニューヨーク州で活発に活動している非営利団体，シェルターなどでボランティアを続けていきたい．

図 12　2019 年アジア専門医集会にて
　岩﨑先生（前アジア獣医専門医評議会会長），辻本先生（前アジア獣医内科専門医委員会会長），西村先生（前アジア獣医外科学会会長）（左）．2023 年アジア獣医外科学会，その演者と座長たち（右），ほぼ全員女性であることに注目．

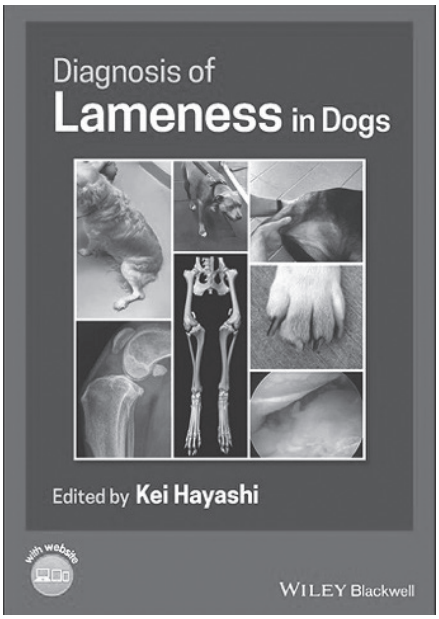


図 13　2023 年に，基本的な診断学をまとめた教科書を国際的なチームで出版した．
　執筆協力してくれたマーク（カナダ），サン（韓国），ポー（台湾）と．

図 14　韓国ソウル大学（上），台湾大学（中），タイのチュラロンコン大学（下）における診断学の授業と実習風景．
　アジアにおける向学心の熱気は素晴らしい．

30年余りのアメリカにおける経験を通じて，臨床の基礎教育は本当に大事だと痛感する．成功も地位も名誉も大して意味ない，多くの人にとって本当に価値あるものは“健康な伴侶動物”と過ごす日常であろう．よって獣医師の責任と使命は重大である．アメリカだけではないかもしれないが，獣医大学関係者は，特に臨床の腕の悪いものほど政治活動に没頭する傾向にある（ように感じる）．そしてそういった輩はどんどん偉くなる（ような気がする）．よって組織やしがらみを超越した教育システムが必要だ．大学はどこでも大変そうなので，日本では獣医師の卒後教育が鍵かなと考えている．アメリカの良いところは取り入れて，つまりできるだけ効率的に，そしてリラックスした環境で教育は行われると良い．そしてその教育の方針としては，原則の理解，診断（触診）技術の習得，そして勤勉にエビデンスを蓄積していく態度など，基本に立ち返ることが世界共通の価値観となって欲しい．幸いなことに私の周囲には高い職業倫理を持った若く有能な獣医専門医が次々と誕生している（図15）．アメリカやヨーロッパや医学部に憧れる時代は終わった．アジアの獣医療の将来は明るい．

図15　若きアメリカ・カナダの獣医外科専門医の新井先生と青木先生と（左），日本人唯一の救急医療集中治療専門医の上田先生（外科専門医の金先生と）（中），コロラド州立大学で研修し見事一発合格でアメリカ専門医となった徳永先生と福島先生（右）．日本，アジアの獣医療の将来は明るい．